史料館の歩み四十年

文部省史料館時代の建物（旧三井文庫）全景　1976年7月15日撮影

国文学研究資料館
史　料　館

史料館の歩み四十年

国文学研究資料館
史　料　館

序

昭和二六年（一九五一）五月に発足した文部省史料館は、昭和四七年（一九七二）五月より国文学研究資料館史料館となり、本年、平成三年（一九九一）は創立四十周年に当たる。この機会に、経て来た道を略述し、関係者の寄稿を加え、参考資料等を付した小冊子を刊行することにした。短期間に作成したものなので、必ずしも十分なものとはいえないが、史料館四〇年の概要を知っていただくことができるであろう。

戦後の混乱期において、主として近世・近代の庶民史料が散逸・消滅するという憂うべき情勢にあった。これら史料の収集・保存を図るため、史料館が設置されたのである。昭和四〇年代に入ると、いわゆる高度成長期となり、社会が比較的安定し、各地に史料を保存する体制が生れ、おのずから史料館の役割も変化してくる。それは、史料を保存するだけではなく、広く公開活用する道をひらき、さらに研究機能を高めることであった。この時期に行われた国文学研究資料館史料館（大学共同利用機関）への改組は、右の傾向を進展させる契機ともなった。

昭和六〇年代に史料館は二つの面で著しく発展する。一つは史料情報の機能であり、もう一つは文書館等の専門職員（いわゆるアーキヴィスト）の研修機能である。前者では、昭和六〇年（一九八五）より今日まで文部省科学研究費補助金の交付を受けて、近世・近代史料の所在情報を収集し、コンピュータを用いてその体系化に努めている。その成果の一つとして『近世・近代史料目録総覧』を記念すべき本年度に刊行する予定である。

後者では、長く続けて来た「近世史料取扱講習会」を、昭和六三年（一九八八）より「史料管理学研修会」と改称し、短期研修のほかに長期研修を加え、近世文書にとどまらず近現代の公文書をも対象とすることにして、記録史料全般の整理・保存・利用に関する幅広い専門的知識と技法とが修得できるようにしたことである。

史料館四〇年の歩みは、種々な面で多くの館外の方々の御協力を得て行われて来た。歴史学また文書館業務に携わる人々にとってさらに有用な機関となることを目ざして努める所存であるので、一層の御支援をお願い申し上げる。

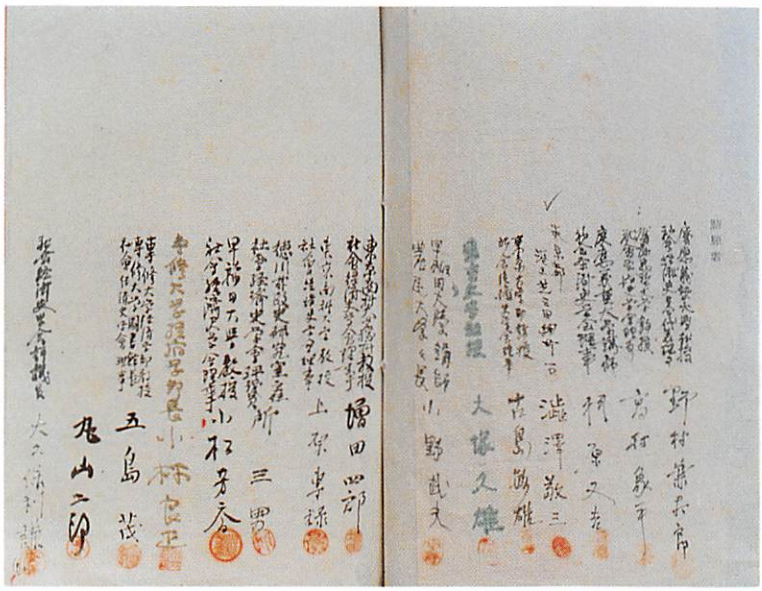
末筆ながら、御多忙の中を御寄稿賜った方々にあつく御礼申し上げる。また本務の傍ら短時日で資料を整理して執筆に当った館員一同の労に謝意を表する。

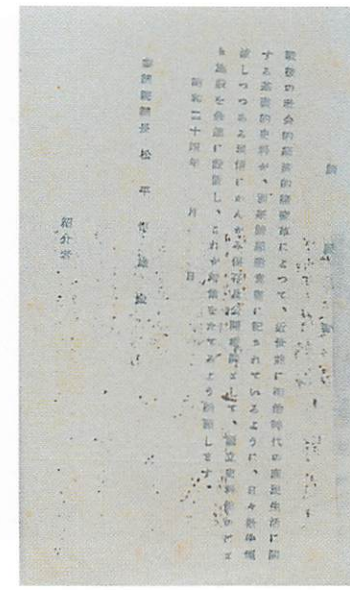
平成　三　年十一月　七　日

国文学研究資料館長
史料館長事務取扱　　小　山　弘　志

写真で綴る史料館の幾星霜

揺籃期の史料館





1949（昭和24）年３月　史料館設置に関する請願書と署名原本（史料館所蔵）

1949年10月に史料館用施設として国が購入した三井文庫建物
（東京都品川区豊町所在）

1949年11月19日　史 料 館 開 館 式

1950（昭和25）年10月　史料収蔵庫

1949年10月　史料整理作業

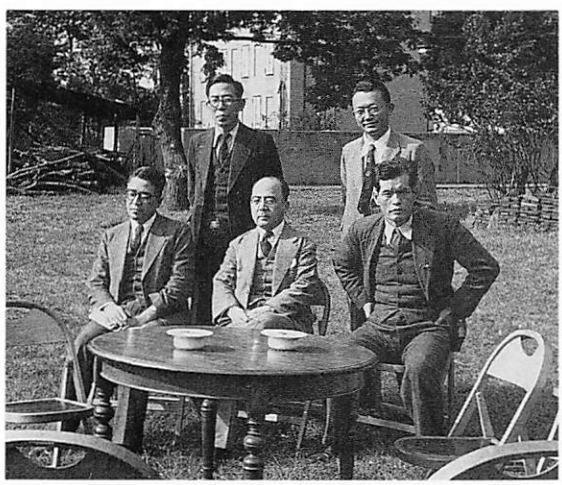
1951（昭和26）年３月　静岡県伊東海岸にて

永戸綾子
中田易直
山辺久美子　荻野　博
織茂三郎　浅井潤子
田久保清子
所　三男
鶴岡実枝子

1949年11月　史料館玄関にて

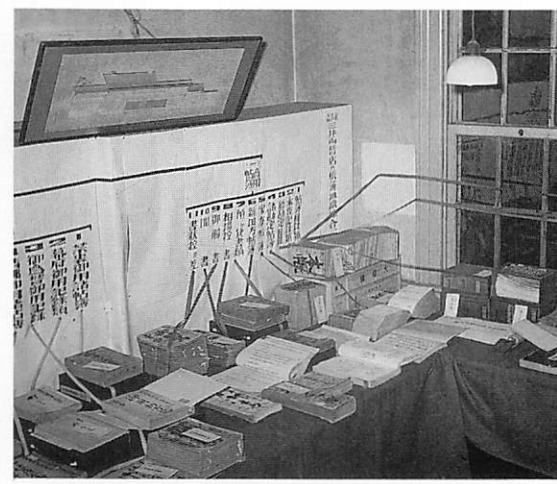
荻野　博
鶴岡実枝子
所　三男
永戸綾子
中井信彦
山口栄蔵

文部省史料館時代（1951年５月30日～1972年４月30日）



1951年11月　第２回史料展示会にて

槐　礼一郎
所　三男
斎藤
野村兼太郎
岡野　澄



1951年11月　第２回史料展示会

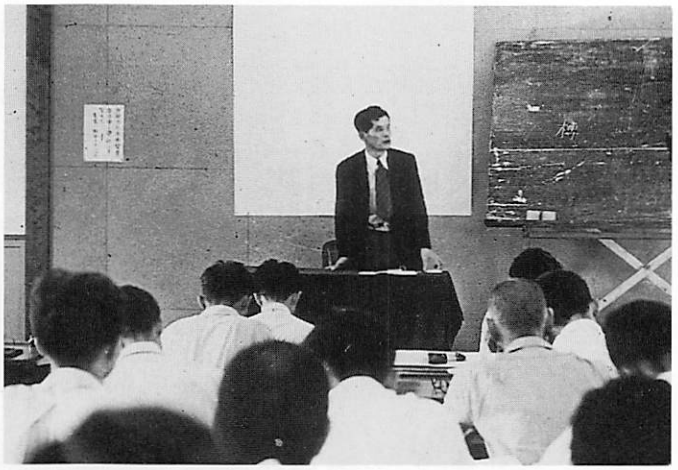
1951年11月　史料館の庭にて

安澤秀一
浅井潤子
吉永　昭
児玉知子
鶴岡実枝子
谷藤怜子
大石慎三郎
原島陽一

1952（昭和27）年4月9日　大石慎三郎氏（中央）送別会

1951年11月　保谷民族博物館アイヌ小屋にて

松沢　秀　原島陽一
鶴岡実枝子　浅井潤子
吉永　昭　谷藤怜子
博物館職員



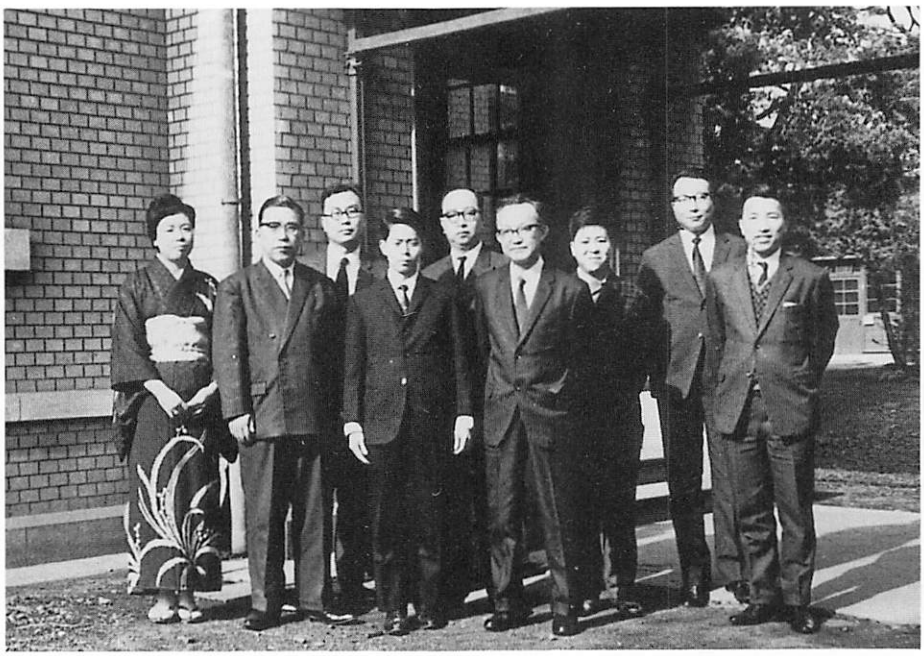
1952（昭和27）年９月　第１回近世史料取扱講習会
講師　右は所　三男　　左は遠藤　武

1960（昭和35）年夏　執務中の史料館員

遠藤　武
原島陽一
鶴岡実枝子
鈴木陽子
藤村潤一郎

1953（昭和28）年１月　山梨県東山梨郡日下部町下井尻
依田泰八氏宅にて史料調査

原島陽一
安澤秀一
所　三男



1965（昭和40）年１月４日　仕事始めの記念写真

大野瑞男
大給近達
中村俊亀智
槐　礼一郎
原島陽一
川平
藤村潤一郎
遠藤　武
浅井潤子

1966（昭和41）年２月10日　鈴木陽子氏送別会

秋山　健
鈴木陽子
遠藤　武

1965年11月　第15回史料展示会受付

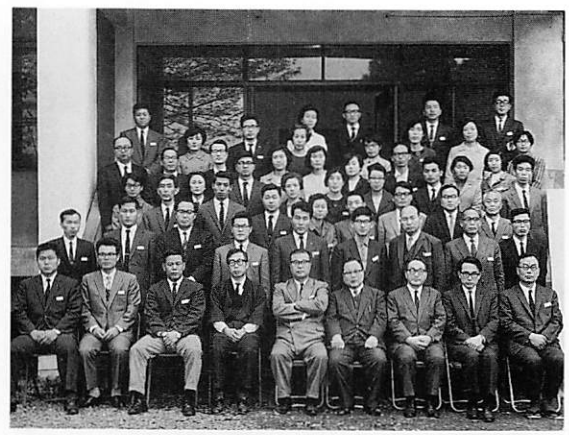
中村俊亀智
藤村潤一郎
鎌田永吉
鶴岡実枝子
原島陽一
大野瑞男

1967（昭和42）年12月　史料館北館前にて

泉谷弘幸
斉藤重臣
中村俊亀智
鈴木　寿
原島陽一
大野瑞男
小和田武紀
浅井潤子
榎本宗次
鶴岡実枝子
木村礼子
西村瑞夫

1971（昭和46）年10月　史料館の庭にて

鎌田永吉
大野瑞男
大中敏子
鶴岡実枝子
榎本宗次
浅井潤子
原島陽一
藤村潤一郎

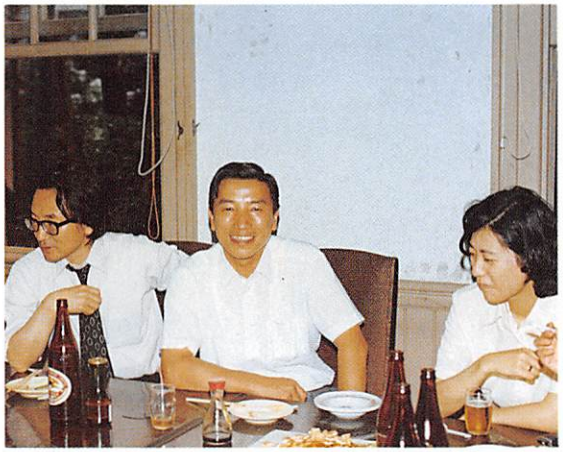


1968（昭和43）年10月　第14回近世史料担当職員講習会での受講生と史料館員の記念写真
（前列向かって右より４人目は史料館評議員の豊田　武氏）

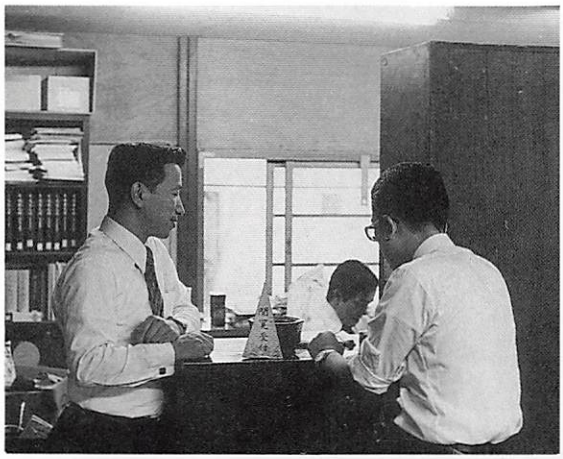
国文学研究資料館史料館時代（1972年５月１日～　　）

1976（昭和51）年７月15日　旧館取り壊しに際しての記念写真

山田哲好
秋山　健
浅井潤子　大野瑞男
深川美枝子
内藤真澄　榎本宗次
井上勝生
鶴岡実枝子
原島陽一　藤村潤一郎
林　宏保
大藤　修



1976年７月　　旧館惜別の宴



1976年８月　旧館取り壊しのため仮設のプレハブで閲覧業務を行う

1976年８月　解体中の旧館

北館の史料収蔵庫

1977（昭和52）年３月竣工の西館（最上階が史料館のスペース）

1977年より史料収蔵庫兼閲覧室となった北館

1978（昭和53）年１月４日　国文学研究資料館の仕事始めの記念写真
（前列中央は市古貞次国文研館長）

1978年７月　文部省共済組合主催軟式テニス大会に
参加した国文学研究資料館チーム

大藤　修（史料館）
久保田紘一（庶務課）
寺尾昌剛（会計課）
安藤正人（史料館）
山田哲好（史料館）
竹之内重雄（会計課）
大石博昭（国　文）
笠谷和比古（史料館）
中村スミ子（国　文）
小林有子（庶務課）
相京真澄（史料館）

1978年２月　井上勝生氏が北海道大学へ転出する
にあたり助手仲間で記念写真（西館屋上にて）

大藤　修
井上勝生
安藤正人

1980（昭和55）年１月　松山城にて

山田哲好
安藤正人
大藤　修

1978年８月　飛騨高山にて

笠谷和比古
大藤　修
安藤正人

1986（昭和61）年　文書館学研究会にて

大藤　修
安澤秀一
（東京都公文書館）
水野　保
廣瀬　睦
（東京都公文書館）
水口政次
（国文研）
歌野　博

1983（昭和58）年　国文学研究資料館レクリェーション大会

1988（昭和63）年８月　国際文書館評議会世界大会（於 パリ）のレセプションにて
向かって右端より安澤秀一、安藤正人

1987（昭和62）年12月　文書館学研修会
（この年臨時に開催）

1988年10月　史料管理学研修会での近世史料の整理実習

1988年９月　史料管理学研修会での講義

1988年度より従来の近世史料取扱講習会を拡充して史料管理学研修会発足

1990（平成２）年８月　絵図の復元作業

1989（平成元）年３月　史料の装備作業

1990年３月９日　原島陽一・安澤秀一両氏の退官を祝う会
向かって右が原島陽一、左が安澤秀一

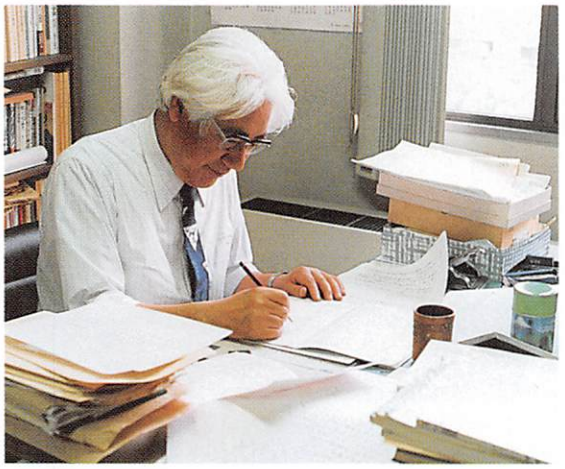
1990年10月30日　全国歴史資料保存利用機関第２次訪中団の一行と中国第２歴史檔案館（南京）の職員の記念写真。史料館より丑木幸男（後列向かって左より６番目）、大藤　修（同７番目）、廣瀬　睦（前列左より４番目）が参加

1990年７月　国際文書館評議会東南アジア地域部会総会（於 マレーシア・クアラルンプール）に安藤正人（右端）と廣瀬　睦（その横）が参加

1991（平成３）年３月28日　浅井潤子氏退官送別会

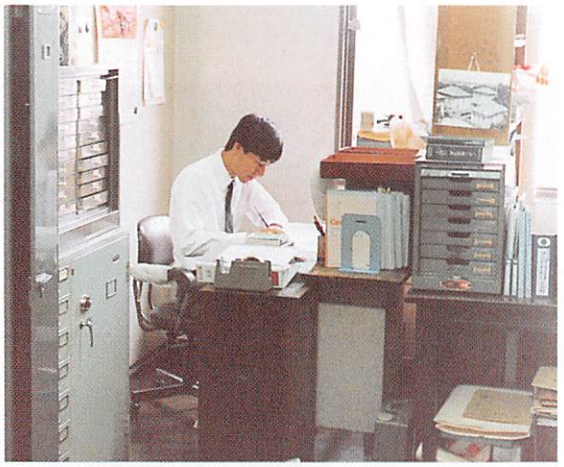
渡邊尚志　森　安彦　廣瀬　睦　大藤　修　毛塚万里　丑木幸男　浅井潤子　山田哲好　大友一雄　鶴岡実枝子　林　宏保　深川美枝子　安藤正人

今日の史料館の風景（1991年5，6月現在）

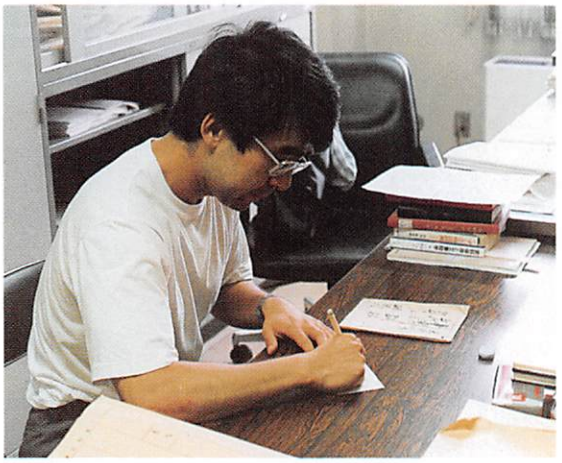


研究室で原稿書きに励む森　安彦

史料館定例研究会



史料館事務室で執務中の林　宏保

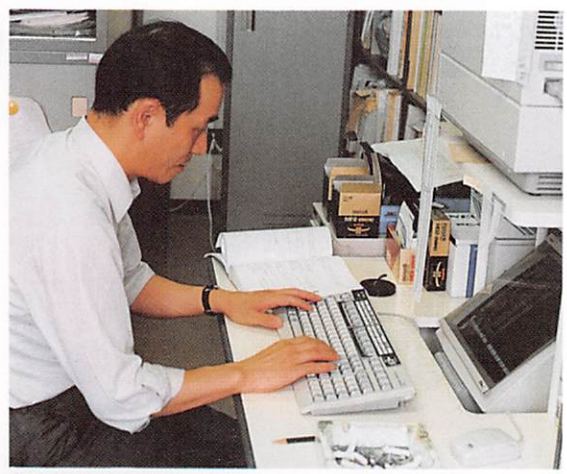


史料整理中の渡邊尚志（左）と渡辺浩一（右）

断裁された高島藩領村々宗門改帳の復元補修作業

史料補修室で作業中の大場菊乃（正面）と
高橋真理（右）

閲覧室（受付係は毛塚万里）



史料所在情報をコンピュータで処理する山田哲好

史料館の風雪を顔に刻み、今日も史料整理に励む
鶴岡実枝子。旧文部省史料館の職員中ただ一人、
現役で40周年を迎えた

６月８日　中国航空航天檔案館の一行（５名）が来館。
近年の史料館は国際交流も活発に行っている

史料館の現職員

大友一雄　丑木幸男
渡辺浩一　鶴岡実枝子
森　安彦
渡邊尚志　大場菊乃
高橋真理
安藤正人　深川美枝子
毛塚万里
大藤　修　山田哲好
林　宏保
廣瀬　睦

記念物として残され、今は蔦に覆われて静かに佇む旧文部省史料館１号書庫

目次

序　小山弘志

写真で綴る史料館の幾星霜

Ⅰ　史料館の歩みと今後の展望……1頁

はじめに……3

一　文部省史料館時代……3

(一)　史料館の設置……3

1　史料館の正式発足まで……3

2　史料館の発足と初期の活動……7

(二)　事業の改善と拡充……11

1　研究機能の充実と新事業……11

2　いわゆる「日本史資料センター」問題と史料館……14

二　国文学研究資料館史料館時代……15

(一)　国文学研究資料館史料館への改組……15

1　国文学研究資料館の創設と「史料館」……15

2　改組後の「史料館」……16

(二)　行政監察「勧告」と「史料館」機能の拡充方向……18

1　行政管理庁の「勧告」……18

2　「史料館」機能の拡充の方向……18

三　現状と今後の展望……19

(一)　情報・閲覧サービス機能……19

1　史料の収集と収蔵史料の公開……19

2　地方史関係刊行物の収集と公開……19

3　近世・近代史料の所在等に関する情報の収集と公開……20

(二)　研究機能……20

(三)　研修・教育機能……21

おわりに……21

Ⅱ　史料館の事業内容……23

一　史料の収集……25

〈表〉　年度別収集件数、購入先別収集件数、所蔵史料県別件数一覧、所蔵史料種別一覧、県別マイクロ・フィルム収集史料一覧、マイクロ・フィルム収集史料種別一覧

二　史料の整理と目録刊行……28

三　地方史誌類と史料所在情報の収集……30

〈表〉　史料所在調査一覧

四　史料と図書の閲覧利用サービス……39

〈表〉　閲覧利用統計

五　史料学・文書館学の研究と成果刊行……43

六　所蔵史料の翻刻・刊行……45

七　史料管理学研修会の開催……47

〈表〉　近世史料取扱講習会開催一覧、文書館学研修会、史料管理

学研修会開催一覧

Ⅲ 史料館と私 ―回想と提言― ……53

史料館の発足に当たって　中田　易直 ……55

史料館草創期の思い出　林　英夫 ……57

史料館の思い出と期待　津田　秀夫 ……59

「玉井家文書」の史料館収蔵をめぐって　大石慎三郎 ……61

史料館在職時代の思い出と期待　吉永　昭 ……62

新館十年　中村俊亀智 ……64

史料館と三井文庫　松本　四郎 ……65

思い出と期待　秀村　選三 ……67

地方在住者の立場から　小林　清治 ……68

昭和四〇年前後のこと　原島　陽一 ……70

史料館への期待　安澤　秀一 ……71

史料館に在職して　大野　瑞男 ……73

史料整理の経験など　井上　勝生 ……74

「真田家文書」と取り組んで　笠谷和比古 ……76

Ⅳ 「史料館と史料保存運動の歩み」年表 ……79

Ⅴ 参考一覧表 ……101

1 歴代評議員一覧 ……103

2 歴代運営協議員一覧 ……104

3 歴代史料館員一覧 ……105

4 収蔵史料一覧 ……108

5 刊行物一覧 ……119

6 史料展示会一覧 ……134

Ⅵ 参考資料 ……135

1 学術史料蒐集の要項（一九四七年度） ……137

2 史料館設置に関する請願及び趣意書（一九四九年三月） ……138

3 国立史料館の構想案（一九五〇年） ……140

4 史料館規程（一九五一年五月三〇日） ……141

5 国文学研究資料館組織運営規則（一九七二年五月一日） ……142

6 行政管理庁行政監察局「国立大学及び国立大学共同利用機関に関する行政監察結果報告書（抄）」（一九八二年六月） ……143

7 行政監察勧告についての日本歴史学協会の要望書（一九八二年八月一〇日） ……144

8 行政監察勧告についての地方史研究協議会の要望書（一九八三年五月二〇日） ……145

9 行政監察勧告に対する文部省の回答（抄）（一九八二年一〇月） ……146

10 国文学研究資料館移転問題についての歴史研究者有志の要望書（一九八八年一二月二四日） ……147

あとがき ……149

あとがき

昨年の夏ごろ、館員の中から、来年は史料館が発足して四十周年を迎えるので、四十年の〝あゆみ〟をまとめたらどうだろうかという声があがった。

館員全員の総意として、ぜひ実現させたいということになった。

それは三つぐらいの理由からであった。

一つは、ここ数年で史料館の陣容が大幅に入れ替わり、文部省史料館以来の第一世代の館員は皆無となる状況があった。すなわち、昨年三月には、原島陽一・安澤秀一の両氏が、本年三月には、浅井潤子氏が、それぞれ定年で退官され、来年度末には鶴岡実枝子氏も定年となる。

第一世代が開拓し、構築してきた史料館業務の成果を継承し、発展させるためにも、第二世代のわれわれとしては、先人の〝あゆみ〟を整理し、学んでいかなければならない。

第二の理由は、移転問題である。三年前に移転対象機関に指定されたが、今のところ具体的な動きはみられない。しかし、いつ現実化するかわからない。本誌は、〝戸越〟での四十年間の記念碑ともいうべきものになるかもしれない。〝戸越〟史料館への愛惜がこめられているのである。

第三の理由は、史料館の将来をどう展望するかということである。史料館の方向性を明確にしておくことは、もっとも重要な課題であり、これまでの〝あゆみ〟を辿ることによって将来への展望を打ち出すことである。

以上の意味をこめて、ここに本誌を刊行することとなったのである。

本誌は、本年十二月七日の「史料館四十周年祝賀会」に向けて発行できるよう準備してきたものである。

本誌の刊行を積極的にご支援・ご指導下さった小山弘志館長には心からお礼申し上げる。

なお、本誌の編集には、大藤　修、大友一雄、渡邊尚志、渡辺浩一、森　安彦の五名が委員となってあたったが、原稿執筆と図表の作成は全館員が分担して行なった。また元館員や関係者の方々からもご寄稿をいただき、感謝申しあげたい。

本誌編さんの過程で、諸資料を整理して感じたことは、戦後の混乱期にあって、当時の歴史学者や文化人が史料保存に大変な情熱をもって取り組み、史料館の設立を実現させたこと、またこれまで種々の難問に遭遇しながらも先輩の館員諸氏や関係者が努力を傾けて史料館を支えたきたことである。

後輩のわれわれとしても史料館の活動を一層充実させ、発展させてゆくよう努力したいものと思う。

今後とも皆様のご指導・ご支援を賜りたい。

平成三年十月二十八日

森　安　彦

史料館の歩み四十年

平成三年十一月三十日　印刷発行

編集兼　国文学研究資料館
発行者　史　料　館
〒142 東京都品川区豊町一丁目十六番十号
電話 〇三―三七八五―七一三一（代）

印刷所　睦美マイクロ株式会社
〒135 東京都江東区木場六丁目十二番五号

（本文用紙は中性紙を使用）

■史料館の歩み

40年